

憎しみという贈り物はあげない

奨励	三木　メイ〔みき・めい〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター助教
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」

（マタイによる福音書　５章３８―３９節）

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」

（マタイによる福音書　５章４３―４４節）

クリスマス・プレゼントの想い出

クリスマスが近づいてくると、皆さんはどんな気持ちになるでしょうか。何となくワクワクしますか。楽しい何かがクリスマスにはあるかもしれない、という気持ちでしょうか。大人になってからは、だんだんクリスマスを待つ楽しさは感じなくなっているのですが、それでも子どもの頃のクリスマス前の何となくワクワクする気持ちを、思い出す時期ではあります。私の父親は牧師でしたので、忙しくてあまり子どもの私にかまってくれませんでした。母親も牧師夫人として忙しいですし、クリスマス前は特に忙しいので、親からクリスマス・プレゼントをもらった記憶はほとんどありません。私が忘れてしまっただけなのかもしれませんが、今頃天国から私の話を聞いて「プレゼントあげたのに」と言って怒っているかもしれません。唯一覚えているのが、25日の朝起きたら枕元に、綺麗な表紙のお絵描き帳がリボンをかけて置いてあったことです。まだ小学生の頃だったのですが、その一瞬だけ「サンタクロースが来たんだ」と心の中で感じたのです。でもその次の瞬間に、「あっ、お母さんだな」と気がつきました。元々疑い深く可愛くない子どもだった私は、教会にやってくるサンタクロースが本物でないことは、かなり幼い頃から知っていたのです。それでもあの時、「私のところにサンタクロースが来てくれたんだ」と感じた一瞬の感動が胸が熱くなる経験というのは、一種の宗教体験と言ってもいいくらい、私にとっては大切な想い出です。小さい頃に自分が確かに愛されていたという一つの記憶として、くっきりはっきり心に刻まれているのです。私は11年前に父を天国に見送り、今年の春に母を見送りました。両親とは、もうこの地上では会えないのですが、愛して育ててくれたその確かな手応えは、私の心の中にしっかりとあります。それが私の生きる力になっていると感じることができるのです。

皆さんは、どんなクリスマス体験をしているのでしょうか。もし皆さんが将来結婚して子どもが生まれて親になったら、どんな贈り物を、どういうふうに子どもに、または愛する家族にあげるのでしょうか。金額ではなく、その心が大切です。生きる力を子どもたちや愛する人に与えるプレゼント。それが一番大切なプレゼントなのではないかと思います。

子どもにあげたい大切なプレゼント

11月13日に、パリで同時多発テロ事件が起きました。この事件で130名の人々が突然命を奪われました。サッカーのスタジアムで、レストランや飲食店で、劇場で、たまたまそこにいた人々が犠牲となり、負傷者も多数出ました。どうしてこんなことが起こったのか、平和であった日常が一変してしまった出来事に、世界中の人々が驚き、恐怖を抱きました。

この事件で妻を失ったフランス人のジャーナリスト、アントワヌ・レリスさんがフェイスブックに、実行犯へのメッセージを投稿しました。その中に「憎しみという贈り物はあげない」という言葉がありました。このメッセージを一部ご紹介いたします。

「金曜の夜、君たちは素晴らしい人の命を奪った。私の最愛の人であり、息子の母親だった。でも君たちを憎むつもりはない。君たちが誰かも知らないし、知りたくもない。君たちは死んだ魂だ。君たちは、神の名において無差別な殺戮（さつりく）をした。もし神が自らの姿に似せて我々人間をつくったのだとしたら、妻の体に撃ち込まれた銃弾の一つ一つは神の心の傷となっているだろう。

だから、決して君たちに憎しみという贈り物はあげない。君たちの望み通りに怒りで応じることは、君たちと同じ無知に屈することになる」（2015年11月20日　朝日新聞デジタル　http://www.asahi.com/articles/ASHCM73BSHCMUHB1033.html）。

彼の息子は1歳5カ月だそうです。愛する妻の命を奪われて、息子と2人だけになってしまったこの人が、殺人者に怒りや憎しみを感じないわけがない、と思うのは私だけではないだろうと思います。しかし、この人は、妻の死という事実直面して間もなく、このメッセージを投稿しているのです。この人の心からの叫びであり、心の闘いの宣言であり、そしてまた幼い息子への愛の証でもあったのではないかと、感じました。「怒りで応じることは、君たちと同じ無知に屈すること」という「無知」というのは、本当の意味での真実の愛と自由と平和の素晴らしさを知らないという意味なのではないでしょうか。テロリストは、怒りと憎しみから無差別殺人を行うことによって、さらに大きな怒りと憎しみと不安と恐怖の波紋を、世界の人々の間に広げていくとする。それは、どんな理由があっても、意味のない死んだ魂のなせるわざである。だから、彼らが望むような怒りと憎しみに翻弄されないように、自分と息子は愛と自由と平和のうちに暮らしていくのだ、と宣戦布告しているのです。メッセージの後半の部分で彼はこう語っています。

「私と息子は2人になった。でも世界中の軍隊よりも強い。（中略）彼は生後17カ月で、いつものようにおやつを食べ、私たちはいつものように遊ぶ。そして、幼い彼の人生が幸せで自由であり続けることが君たちを辱めるだろう。彼の憎しみを勝ち取ることもないのだから」。

母親を殺された1歳の息子が大きくなった時、テロリストのように怒りと憎しみをもって生きるのではなく、愛と自由と平和において幸せに生きていけるように育てていくのだ、という彼の決意が伝わってきます。

私はこれを読んで、すぐに「これがイエス・キリストがこの世に來られたことの意味なのだ」と感じました。「キリストの平和」というのは、こういうことだと思いました。抵抗しがたいような暴力や、恐怖をもたせる武力によって支配を広げようとする人間が、この世界にはどの時代にも存在しています。そういう存在に対して、同じような武力や暴力で応戦するのではなく、愛と平和を大切にすることを実践し、それを守っていく生き方によって戦うのです。それが、イエス・キリストの生涯でしたし、そのための十字架上の死でした。レリスさんは、そのキリストの十字架の上に、自分の怒りと憎しみを押し殺して、息子を愛と自由と平和に導こうとしているのでしょう。これは、自分の息子に生きる力を与える父親からのラブレター、愛する息子への真実のプレゼントだと言えるのではないかと、私は思います。

愛と自由と平和を

こういうテロ事件が今年は続いて起きました。世界のどこで次のテロが起こるか分からない、という不安と恐怖が広がっています。なぜこのようなことが起こってしまうのか、さまざまな分析がなされています。単なる宗教間の対立では説明できません。人間は、やってはいけないはずの戦争や殺戮を正当化するために、宗教を利用してきた歴史をもっていることを忘れてはいけません。そして、今回のテロ実行犯の多くが、欧米で生まれ育った若者たちだ、ということも忘れてはいけない事実です。パリ同時多発テロの実行犯の多くは、ベルギーやフランスで生まれ育った若者だったそうです。このテロの首謀者とされているアブデルアミド・アバウドは、ベルギーの首都ブリュッセルのモランパーク地区で育ち、中流家庭の子どもが通学するカトリック系の名門中学校に通っていたそうです。ということは、聖書やキリスト教について学んだこともあったのではないのでしょうか。元同級生は、アバウドのことを「冗談好きで、クラスでも目立つおもしろいやつ」だったと言っています。けれど、盗みを繰り返すようになって退学処分になり、その後、窃盗などで刑務所に服役するようになった。何がきっかけでそうなったのかは分かりませんが、小さなきっかけで道を踏み外していった非行少年の1人だったようです。多くの人を動かす何かカリスマ的な力をもつ人物ではなさそうなのです。

この地区で若者の対策に携わっている人はこう分析しています。「テロは彼らにとって反社会的な行為、『非行』の一つに過ぎなかった。今回のテロは、宗教というより、そもそも自分が何者であるかという若者の意識の崩壊の問題だ」。

アバウドの父親はモロッコ系の移民です。しかしその子どもたちはベルギー生まれ。そういう移民の子どもが多いこの地域の若者の失業率は4割を超えるそうです。モロッコで生活したことのないでモロッコ人としてのアイデンティティーはもてない、そしてベルギーで生まれ育っても差別や格差に直面し、仕事に就けない。そういう状況に置かれた若者たちの社会に対する憎しみを絡めとって、テロにつなぐネットワークが存在しているという現実があるのです。

テロ実行犯となってしまった若者たちが、もし子どもの時に愛と自由と平和を感じられる社会や人間関係の中で育っていれば、どうだったのだろうか、と想像します。愛と自由と平和の尊さを信じ、希望と夢をもつことができれば、テロリストにはなっていなかったのではないのでしょうか。若者が、自分が何者であるかという意識を自分のものにしていく、そしてどう生きていくべきかを知る道を備えていくこと。それがいかに重要であるかを、私は改めて考えさせられました。そのために、私たちは教育環境を整え、社会での差別や格差をなくしていくという課題を常に意識して、本当の意味での愛と自由と平和の尊さを伝え、そしてそれをいつも求めていかなくてもならないのです。

闇を照らす光として

今日の聖書箇所は、「復讐してはならない」「敵を愛しなさい」という有名な箇所です。普通に読むと、右の頬を打たれたら、やり返さずに左の頬を向けなさい、なんてとてもできない、と感じてしまう箇所です。でも、あのメッセージを書いたレリスさんは、それをしています。そうすることの大切な意味をしっかりと知っているからです。愛と自由と平和の意味

を知っているからです。

敵を愛することも難しいです。ですが、憎しみと怒りで応じてしまうと、その連鎖が繰り返されてしまいます。その負の連鎖を、愛によって断ち切るために、キリストはこの世に生まれ、闇を照らす光となり、十字架の死を通して、人々の心の中に復活されました。

平和でないこの世に、平和をもたらすために来られたイエス・キリストです。そのキリストが私たちの心を守り導いて、愛と自由と平和が実現されるように、悲しみ苦しみのなかにある人々と共に祈り求めていきましょう。

2015年12月9日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録